

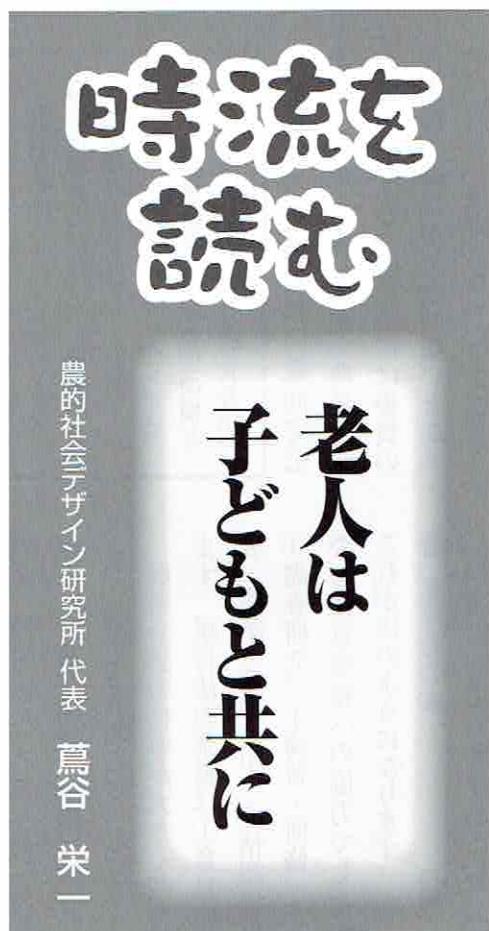
## ヘルシンキの老人ホーム

北欧の老人介護施設を見て回る中で、特に印象に残っている一つがフィンランドのヘルシンキ郊外にある施設である。ヘルシンキの中心街からバスに乗って小一時間。森が途切れ芝生の敷地が広がる中に木造の施設が建てられていた。10人ほどが収容できるこじんまりした老人ホームで、友人のお母さんがNPOを立ち上げて運営しているものであった。小さな施設であるが故に家庭的な雰囲気が漂い、入居者も和気あいあいに暮らしており表情も明るい。その表情がさらには輝いたのが幾人の子どもたちが入ってきた時である。似た建物が並んでいて気づかなかったのであるが、老人ホームの隣に幼稚園があり、休み時間になると園児たちが施設に入ってきたは、盛んにお話ししていく。子どもたちとのやりとりがお年寄りのエネルギーになり生き甲斐になっている。お年寄りと子どもたちとの相性がとてもいいことを強

く印象付けられたのである。

## 「また明日」という空間

日本でもお年寄りと子どもたちが気軽に行き来できる施設があつてもいいのにと思っていたところ、先日、東京都小金井市にある



「また明日」に出会った。NPO法人が運営し、デイホームと保育園、そして寄合所の三つの機能を提供している。すなわち認知症対応型通所介護のためのデイホームと、認可外保育施設としての保育園と、だれでも集うことのできる

交流スペースである寄合所の機能を持つが、アパートの1階部分にある5戸の壁を取り払って確保したスペースを上手に生かして、三つがほどよく調和し、温もりのある活動が展開されている。二度ほど足を運んだだけであるが、認知

三つの機能を一体化させての運営にはそれなりの苦労もあるようであるが、まさに現場の実情・実態を踏まえて生み出されてきた知識・工夫といえる。そしてこれは大きな家族による地域のあたらしいコミュニケーションづくりもある。親が仕事で時間に追われて子どもと接する時間は少なくなつてしまつているが、時間にゆとりのあるお年寄りだからこそできる役割がある。そうした触れ合いを通じて、孫の世代にお年寄りの経験・体験を伝えていく。高齢化がすすむ今だからこそ、農村での百姓仕事という生き甲斐に加えて、形はともかく、小さくていい、手作りによる、こうした空間が必要であり、各地に広げていく試みが求められる。

り昼夜したりしている様子を見ていると、この空間のすばらしさが体に沁みてきて、思わず体が熱くなつてくるような感じがする。

## お年寄りだからできる役割